

## 『硝子戸の中』論

——生と死の葛藤をめぐって——

山 口 洋 子

### 一、はじめに

『硝子戸の中』第一章に、漱石は、『春に何か書いて見ろ』という朝日新聞社の依頼に応じて、『自分以外にあまり関係のない詰らぬ事』を書き始めると宣言した。この自分の周辺を描くという設定は、作家にとって最も『本当の事実』を描きやすいように思われるが、どうもそう簡単なことではないらしい。それは、最終章の『本当の事実』は人間の力で叙述出来る筈がない』という一文からも推察できる。漱石は、『身の上を語る』場合でも、『全く色気を取り除き得る程度』に達しなかったという。それは、語り手『私』が、その周辺で起こった出来事について、自分の『色気』(主観)を取り除いて語ることができなかったことを意味している。しかし、『私』は、それに『不快を感ずる』人がいたとしても、『其不快の上に跨がつて、一般の人類をひろく見渡しながらかく微笑してゐる』という。さらに、『詰らない事を書い

た自分』を『恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐる』ともいう。つまり、『私』は他者の『不快』(批判)を排除し、『色気』を取り除かず描かれた事実を受け入れ、主観を取り除くことができなかった『私』を容認する姿勢を取っている。

『硝子戸の中』と題されたそれは、大正四年一月十三日から二月二十三日まで、東京・大阪の両「朝日新聞」に連載され、三十九編から成る小品群となつた。その内容は、幼少年時代から現在までの、漱石の身のまわりで起こった出来事に対する回想であり、晩年を迎えた漱石の心境までもうかがうことができる。

冒頭によると、この小品の語り手の位置は『書齋にゐる私』つまり『硝子戸の中』にあることがわかる。

硝子戸の中から外を見渡すと、霜除をした芭蕉だの、赤い実の結つた梅もどきの枝だの、無遠慮に直立した電信柱だのがす

ぐ眼に着くが、其他に是と云つて数へ立てる程のものは殆んど視線に入つて来ない。書齋にゐる私の眼界は極めて単調でさうして又極めて狭いのである。(一)

外界から隔てられた《硝子戸の中》に腰を握え、語り手は何をみようとしたのか。それは『永日小品』に描かれているような、書齋から覗いた事実——例えば、飼猫の墓に供えられた水をこっそり飲んでゐる娘の姿（『猫の墓』）——ばかりではない。『硝子戸の中』に語られている《事実》の背後には、絶えず漱石の意識が存在している。三章にわたつて丁寧な描かれてゐる飼犬の死を悼む話では、自身の生と死に関する葛藤が垣間見える。《死は生よりも尊とい》という言葉が、《近頃では絶えず私の胸を往来するようになつた》と漱石はいう。この葛藤は、『硝子戸の中』に一貫して底流してゐるものであるが、漱石は自身の生の軌跡を顧みることによつてこの問題にどう向かい合つたのか。

『硝子戸の中』には、回想されてゐる漱石、回想してゐる漱石、それらを総合的に見つめる漱石が混在してゐる。その構成は作品の解釈をより複雑化させてゐるが、幼少期から執筆時まで様々な時間軸を自由に往来し、自己を客観的に認識することによつて、はじめて描くことができた《事実》があるはずである。本論では、漱石の過去や現在の体験が、その生と死に対する意識と与へてゐる影響を考察し、その体験を取上げて《色気》を取り除かずに

描いた漱石の意図に迫りたい。

## 二、構想メモ

《硝子戸の中》から、外界を眺める《私》は極めて客観的な姿勢をとつてゐる。

然し私の頭は時々動く。気分も多少は変わる。いくら狭い世界の中でも狭いなりに事件が起つて来る。それから小さい私と広い世の中とを隔離してゐる此硝子戸の中へ、時々人が入つて来る。それが又私に取つては思ひ掛けない人で、私の思ひ掛けない事を云つたり為たりする。私は興味に充ちた眼をもつて夫等の人を迎へたり送つたりした事さへある。

私はそんなものを少し書きつゞけて見やうかと思ふ。(一)

しかし、実際に描かれてゐる《そんなもの》は、『硝子戸の中』に入つてきた人物のことばかりではなく、漱石の過去（幼少期の思い出）を素材としたものも含まれてゐる。そこには、養子に出されてゐた事実まで赤裸々に告白されてゐるため、『硝子戸の中』は漱石の根元を探る重要な手掛かりとして、多くの論者に注目されてきた。

特に『硝子戸の中』の構想メモ（大正四年一月頃の「断片」）は、重松泰雄氏を始めとする数名の研究者によつて分析され、構

想メモに記されていない小品の意味が問われている(次ページ一覽表参照。①は内容を、②は内容に関係がある章を、③はその内容が『硝子戸の中』執筆時の漱石にとっていつの出来事なのかを、④は構想メモにあるものに\*印を記した)。重松氏も指摘しておられるが、この一覽表をみると、過去(特に漱石の幼少期)を題材とするものが、構想メモにほとんど記されていないことがわかる(三十一項目中、構想メモに記されていたものは、現在十六例、過去三例。構想メモに記されていないものが、現在三例、過去九例と顕著である)。これは、原構想と完成原稿を比較する上で、見逃すことができない事実であろう。

『硝子戸の中』執筆期の漱石の精神状態は、鏡子夫人の『漱石の思ひ出』にも描かれているように、かなり不安定であり、この原構想との相違、および最終章で《微笑》という心境にたどり着いた原因は、興味深い謎として論じられてきた。その中でも重松氏が論証した、木下杢太郎『唐草表紙』の影響についての考察は興味深い。漱石は杢太郎に充てた書簡(後に、『唐草表紙』序文として使用される)で、杢太郎が《幼児の追憶》を《美しい夢のやう》に《叙述》していることに触れ、《何時の間にか夢幻の世界》に連れ込まれ《擒》にされて仕舞った》と絶賛しているが、重松氏は『唐草表紙』を読むことにより精神的な安定をも得たはずと指摘する。『硝子戸の中』における《現在から過去へ、過去から現在への振り子運動》は、漱石にとって《現実の苦渋を浄化

し、中和し、且つまた相対化せんとする試み》だったのではないかとという推察は、核心をついたものといえるだろう。さらに重松氏は、『硝子戸の中』の後半部に、原構想の内容を織り込んだ漱石の執筆意図を、《作品の再組織を図ろうとした》ためとも捉えている。

ところが『硝子戸の中』の構想メモには、現実の出来事を描こうとする漱石の意思をうかがうことができる。現実を描くためには、積み重ねてきた過去と向かい合うことも必要なはずである。しかし、あえて漱石は、『道草』において《養子に遣られた》過去を赤裸々に描く前に、『硝子戸の中』に《美しい夢のやう》な過去を描いた。漱石にとって、『硝子戸の中』で自分の原風景を《美しい夢のやう》に描くことは、『道草』において自身の生(過去)と正面から向かい合うために必要な試みだったのではないだろうか。

### 三、生と死について

漱石は、寺田寅彦宛(大正四年一月一日)の年賀状に《今年は僕が死ぬかもしれない》と書いた。修善寺の大患と呼ばれる自身の臨死体験はもちろん、主治医であった長与病院長、恋愛相手との噂も囁かれた大塚楠緒子など、身近な人々の死を目の当たりにした不安がそう書かせたのであろうが、『硝子戸の中』執筆期に、漱石が自らの死について意識していたことも示唆している。

病と死	姉たちの芝居見物	豆腐屋の隣の香席	馬場下	頭を片づけたい女	お作	床屋	講演の薄謝	泥棒	播州の岩崎という男	他人の原稿を読む	友人O(太田達人)	若い女の告白	ヘクトーという犬	笑い顔の写真	はじめに	①
二十二	二十一	二十	十九	十八	十七	十六	十五	十四	十二・十三	十一	九・十	六・七・八	三・四・五	二	一	②
現在	過去	過去	過去	現在	過去	現在	現在	過去	現在	現在	現在	現在	現在	現在	現在	③
*							*	*	*	*	*	*	*	*	*	④

むすび	母千枝	長兄	伊勢本の思い出	講演の反響	他との交渉	喜ちゃん	継統	生い立ち	三代目の猫	平等観と差別観	益さんと庄さん	大塚楠緒子	自殺した芸者	喜久井町	①
三十九	三十七・三十八	三十六	三十五	三十四	三十三	三十一・三十二	三十	二十九	二十八	二十七	二十六	二十五	二十四	二十三	②
現在	過去	過去	過去	現在	現在	過去	現在	過去	現在	現在	過去	現在	現在	過去	③
*				*	*	*	*	*	*	*	*	*			④

例えば、飼犬ヘクトーの生(三・四・五)の描き方に注目してみたい。小犬の頃は可愛がられていたが、成長するにつれてその存在を忘れられ、ついには病を患い孤独な最期を迎えたヘクトー。その死と同時期に体調を崩した漱石は、自身とヘクトーの人生を重ねあわせ、《まだ生々しく光つてゐる》ヘクトーの墓標や《薄黒く朽ち掛けた》猫の墓標を眺め、いづれ《二つとも同じ色に古びて》《人の眼に付かなくなるだらう》と世の無常を嘆く。ヘクトーのために用意するように命じた白木の墓標には、《秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ》という一句が記された。外界から切り離されてしまう「死」という現実には、自身が直面しているからこそ生まれた一句であろう。一方、『三四郎』執筆時の漱石は、飼猫の死に同情した妻に請われて、その墓標に《此下に稲妻起る宵あらん》と記した。死を目前にした猫の《眼の色は段々沈んで行く》が、《日が落ちて微かな稲妻があらはれる様な気がした》(『永日小品』「猫の墓」)という。晩年を迎えた漱石の心情との違いが興味深い。

『硝子戸の中』において、漱石の死生観は次のように記されている。

不愉快に充ちた人生をとぼく、辿りつつある私は、自分の何時か一度到着しなければならぬ死といふ境地に就いて常に考へてゐる。さうして其死といふものを生よりは楽なものだとば

かり信じてゐる。ある時はそれを人間として達し得る最上至高の状態だと思ふ事もある。

「死は生よりも尊とい」

斯ういふ言葉が近頃では絶えず私の胸を往來するようになった。

然し現在の私は今までのあたりに生きてゐる。私の父母、私の祖父母、私の曾祖父母、それから順次に溯ぼつて、百年、二百年、乃至千年万年の間に馴致された習慣を、私一代で解脱する事が出来ないの、私は依然として此生に執着してゐるのである。(八)

その一方で、《悲痛》な過去の《記憶》を鮮明に残したいために、生死の選択に悩む若い女(六・七)の相談に応じた漱石は、《凡てを癒す》《公平な》《時》の流れ》に従い、《いくら平凡でも生きて行く方》を勧める。

公平な「時」は大事な宝物を彼女の手から奪ふ代りに、其創口も次第に治療して呉れるのである。烈しい生の歓喜を夢のやうに暈してしまふと同時に、今の歓喜に伴なう生々しい苦痛も取り除ける手段を怠らないのである。

私は深い恋愛に根ざしてゐる熱烈な記憶を取り上げてても彼女の創口から滴る血潮を「時」に拭はしめようとした。いくら平

凡でも生きて行く方が死ぬよりも私から見た彼女には適当だったからである（八）

時間の経過によって、人はどのような過去も乗り越えることができるかと漱石はいう。しかし、一方で《常に生よりも死を尊いと信じてゐる》はずであるのに、《不愉快に充ちた生といふものを超越する事》ができない《自分》の矛盾を、《半信半疑の眼で凝と》眺めることになるのである。

その葛藤は、大正四年一月頃の「断片」にもうかがうことができる。

○生よりも死、然し是では生を厭ふといふ意味があるから、生死を一貫しなくてはならない、(もしくは超越)、すると現象即実在、相対即絶対でなくては不可になる。「それは理窟でさうなる順序だと考へる丈なのでせう」「さうかも知れない」「考へてそこへ到れるのですか」「たゞ行きたいと思ふのです」

散っていく木の葉を見て、あっさりとして《悟つた》友人O（太田達人／九）とは対照的である。このような苦悩を抱えながら、漱石は自らの過去を顧みていく。《時》が経過しても、なお記憶している過去と向き合うこと。それは漱石にとって、生と死の問題における時間の役割を確認するための重要な作業であつたはず

である。「ヘクトーの話」「若い女の告白」を経て、自らの記憶（過去）を紐解き始める漱石の手法は、自然な流れであつたともいえるだろう。

#### 四、時間の役割

『硝子戸の中』に描かれている漱石の過去は、大きく二つに分けることができる。一つは、漱石の家族に関わる内容（生まれ育つた土地のこと、長兄や母のことなど）であり、もう一つは、家族以外の人々に関わる内容（お作という芸者や幼なじみの喜ちゃんのことなど）である。しかし、この過去に対する漱石の記憶には、微妙な差異がみられる。前者はぼんやりとして不鮮明に、後者は淡々と物語のように描かれているのである。例えば、漱石が生まれた喜久井町の記憶は、《縁故の深い》町の名前でありながらも、《あまり聞き慣れて育つた所為か、ちつとも私の過去を誘ひ出す懐かしい響》を与えてくれないという（二十三）。また、馬場下の豆腐屋の隣にあつた寄席については《夢幻のやうに》しか思い出せず、《こんな場末に人寄場のあらう筈がない》、《何んなに想像を逞ましくしても、夢としか考へられない》と、自身に曖昧さに不審を抱く（二十）。《私の家に関する私の記憶は、惣じて斯ういふ風に鄙びている。さうして何処かに薄ら寒い憐れな影を宿してゐる》（二十一）という自覚はあるものの、その理由は定かでない。幼少期に過ごした家に泥棒が入つた出来事さえ、妻

が実兄から茶受話に聞いた内容を描いたという設定になっており、家族という共同体との繋がりが希薄であった可能性も推察できる。しかし、家族が関係する過去の出来事が、漱石に悪い印象ばかりを与えていたとも断言できない。《書齋に独り坐つて》《心を自由に遊ばせて置くと、時々私の聯想が、喜久井町の四字にばかりと出会つたなり、其所でしばらく低徊し始める事がある》とも記しているからである（二二三）。

この複雑な描写は、実母の干枝についても例外ではない。原構想にも記されていなかった母に対する幼少期の記憶を、『硝子戸の中』の終盤になって紐解くことは、漱石にとって、《記念の為》に《何か書いて置きたい》という気持ち以上の意味を持つものと言っても過言ではないだろう。干枝という名前は《母丈の名前で、決して外の女の名前であつてはならない様な気がする》というほど、大切な存在である母は、次の三つのイメージを持つものとして繰り返し描かれている。

① 大きな眼鏡をかけて裁縫をしている。

② 裁縫をするとき背にしている襖の張交の石摺「生死事大無常迅速云々」を思い出す。

③ 紺無地の縞の帷子を着て、幅の狭い黒縹子の帯を締めている。何時もこの夏装束である。

ある日、幼少期の漱石は、《自分の所有でない金銭を多額に消費》してしまふという悪夢に苦しみ、《大きな声を揚げて》母を

呼び、自分の《苦しみを話して、何うかして下さいと頼んだ》。

その時、母は微笑しながら《心配しないで好いよ。御母さんがいくらでも御金を出して上げるから》となぐさめる。幼少期の漱石は、この母からの慰謝の言葉により、不安から解放されたという。この出来事は、《全部夢なのか、又は半分丈本当なのか》判断としない。しかし、漱石の心には、《宅中で一番私を可愛がつて呉れたものは母だといふ強い親しみ》が宿っている。越智治雄氏は、この悪夢とそれに対する母の対応を、《意識の深い闇の中から存在の不幸や愛の幻が立ち現れてくるだけ》と捉え、過去の記憶とは、《時間》を含め、《自分の所有でないもの》の《消費》を《償いうるもの》なのかもしれないと解釈する。確かに、『硝子戸の中』に登場する母は、《存在の不幸》や《愛の幻》を思わせる役割を担っている。例えば、第二十九章では、漱石の生い立ちについて触れられているが、漱石を出産した母は、《こんな年齒をして懐妊するのは面目ないと云つた》とあり、結局里子にだされてしまった体験が描かれている。《私は普通の末ツ子のやうに決して両親から可愛がられなかつた》という自覚を持つ漱石にとって、母に対する感情が好意的なものばかりであるとは断言できない。むしろ、その《存在の不幸》を思わせる対象として描かれている。しかし、幼い漱石が見た悪夢の中の母は、身に覚えのない失態を引き受けてくれる、唯一の救世主として登場する。この母親の言動は、いうならば無償の愛であり、越智氏も《愛の

幻」と捉えている。しかし、漱石は〈幻〉以上の意味を持つ存在（『救世主』）として母を描いた。もちろん、漱石にとって実際の母は〈存在の不幸〉を思わせる人物でもある。しかし、『時』の経過により、実際の母に対する漱石の印象は、イメージ化された「やさしい母親像」が突出したものに變化したのではないだろうか。

三浦雅士氏は、この母像を〈言葉以上に、イメージとして、それも深い安心感を与えるイメージとして提示〉されているとし、それは〈言葉の次元をはみだして、語り手を包みこむもの〉としての意味を持つと指摘する。『硝子戸の中』特有の〈多幸症〉のような〈不思議に明るい気分〉があってはじめて、この〈完璧〉な母像を描くことができたのであり、漱石にとって『硝子戸の中』は、自分を養子に出した実母に対する複雑な心境を突き抜け、〈母を赦す地点までの長い旅路〉であったという結論は、漱石の生の根源を考察する上でも注目すべきものである。

漱石にとって、母の全貌を《夢》として捉えることは、《一番私を可愛がつて呉れた》母の愛を、真実のものとして確信するための必然であった。だからこそ、『硝子戸の中』よりも過去の出來事を具体的に取り込み、現実と正面から向かい合った『道草』には実母が登場しないのではないだろうか。

ところで、母のイメージの一つに《生死事大無常迅速云々》という襖の張交の文字があるが、これは何を意味するのか。実際

に、漱石の実家にこのような襖があったのかという事実は確認する術がないが、敢えてこの文字を母に背負わせていることにこだわりたい。晩年に親交を深めた若い禅僧鬼村元成に宛てた書簡中（大正四年四月十九日）でも、漱石はこの言葉に触れており、強いこだわりが感じられる。漱石の蔵書『禅門法語集』には、『生死事大無常迅速云々』を結語とする「抜粋仮名法語」にかなりの書き込みが残されており、『生死事大無常迅速云々』という疑問に取り組もうとした姿勢をうかがうことができる。「生死の問題は極めて重大であり、輪廻生死をいかにして超越するかが最大事であるが、人命は瞬時もとどまらない」——生と死、それに関わる『時』にこだわった漱石にとって、この言葉は大きな壁であったに違いない。

つまり、その言葉を背負い、最終章に登場する母は様々な問題が集約された、必要不可欠な象徴としての可能性も孕んでいるのである。

## 五、神を求めて

もし世の中に全知全能の神があるならば、私は其神の前に跪びて、私に豪髪の疑を挟む余地もない程明らかな直覚を与へて、私を此苦悶から解脱せしめん事を祈る。でなければ、此不明な私の前に出て来る凡ての人を、玲瓏透徹な正直ものに変化



して、私と其人との魂がぴたりと合ふやうな幸福を授け給はん事を祈る。今の私は馬鹿で人に騙されるか、或は疑ひ深くて人を容れる事が出来ないか、此両方だけしかない様な気がする。不安で、不透明で、不愉快に充ちてゐる。もしそれが生涯つゞくとするならば、人間とはどんなに不幸なものだらう。(三十

三)

信仰を持たない漱石が、他者を通して自己を問うことの必然性から、絶対者の視点を持つ神を意識し、本音を強くぶつけている。他者と対峙する上での苦惱。理屈で信じるのではなく、自ら絶対者の存在を求めんとする発言は、『硝子戸の中』執筆後に描かれた、『道草』にもみることが出来る。

健三はたゞ金銭上の慾を満たさうとして、其慾に伴はない程度の幼稚な頭腦を精一杯に働かせている老人を寧ろ憐れに思つた。さうして凹んだ眼を今擦り硝子の蓋の傍へ寄せて、研究でもする時のやうに、暗い灯を見詰めてゐる彼を気の毒な人として眺めた。

「彼は斯うして老いた」

島田の一生を煎じ詰めたやうな一句を眼の前に味はつた健三は、自分は果して何うして老ゆるのだらうかと考へた。彼は神といふ言葉が嫌であつた。然し其時の彼の心にはたしかに神と

いふ言葉が出た。さうして、若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強慾な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ氣が強くなった。(『道草』・四十八)

養父島田と自らを比較した健三の心情が、神の眼を意識しつつ、客観的に描かれている。このような神の認識という視点より、両作品を比較した場合、次のような興味深い相違に気づく。

『硝子戸の中』では、『微笑』という一種悟りのような心境にたどり着いたものの、自分に対して《全く色氣を取り除き得る程度に達してゐなかつた》という。また、神に対しても、《もし世の中に全知全能の神があるならば、私は其神の前に跪つて、私に豪髮の疑を挟む余地もない程明らかな直覚を与へて、私を此苦悶から解脱せしめん事を祈る》というやうに激しく自己の心情を吐き出している。一方、『道草』においては、自らの《卑しい所》《悪い所》《面目を失するやうな》《欠点》を描いているにもかかわらず、《若し其神が神の眼で自分の一生を通して見たならば、此強慾な老人の一生と大した変りはないかも知れないといふ氣が強くなった》というやうに冷静に自己を分析している。つまり、『硝子戸の中』における神は即自的なものであり、『道草』における神は対自的なものであるといえよう。

最終章、漱石は《日当りの好い》縁側に机を持ち出し《冥想》する。《もう何を書いても詰らないのだといふ呑気な考》をおこ

したり、《何故あんなものを書いたのだらうという矛盾》に翻弄され始めるが、そのうちに《神經》が落ち着いた漱石は、次のような心境に到達する。

(…前略…) 私の書いたものは懺悔ではない。私の罪は——もしそれを罪と云ひ得るならば、——頗ぶる明るい側からばかり写されてゐたらう。其所にある人は一種の不快感を感じるかも知れない。然し私自身は今其不快の上に跨がつて、一般の人類をひろく見渡しながらか微笑してゐるのである。今迄詰らない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、恰もそれが他人であつたかの感を抱きつゝ、矢張り微笑してゐるのである。(二十九)

高木文雄氏は、『私の書いたものは懺悔ではない』という一文に注目し、懺悔はあくまでも《神にむかつてなされるものであり》、《文学作品》は《懺悔と似ていても、懺悔そのものでありうるわけがない》という。また、漱石のさらけ出した《自己の弱点》が、《ふしぎな明るい光り》によつて照らされていることを指摘し、それを宗教的な意味をこめて《ゆるめ》と称し、漱石は《いくらか微笑に執していると思うが、とにかく、すばらしい一歩前進であつた》と評価している。しかし、一方ではこの微笑の根拠は、《静かな春の光》に象徴される「自然」にすぎず、《いちおうは、絶対化された自己本位を相対化することには成功してい

る》ものの、《この自然を根拠としたゆるめ》によつて、どこまで書けるか》という問題を提起し、《自己の過去を本格的に見て創作》することの必然性を説いている。これは、漱石の「私」が好い方向に《ゆるめ》られたことを意味するものと思われるが、確かに、漱石を悪夢から救つた母の《微笑》同様、漱石が到達した《微笑》をもつて自己をみることは、漱石にとつて自己を開放するための最大の救いであらう。だからこそ、不仲であつた父の《虚栄心》に対して《厭な心持》もせず、《微笑》して許すこともできた(二十三) にはあるまいか。それはこれまで閉ざし続けていた、《硝子戸を開け放》す姿にも象徴的に表れている。

『硝子戸の中』に描かれた漱石の生は、『時』が経つにつれて癒され、イメージ化された過去の記憶により、無意識に支えられてきた。しかし、『まだ冬だ冬だと思つてゐ』た漱石の心に、『蕩揺し始めた』春は、再び自身の過去と向き合う方向を照らし始めたのである。『硝子戸の中』を書き終えた漱石は、縁側で一眠りするといふ。その眠りから覚めた後、『道草』執筆に取り組むことは、漱石にとつての必然であつたに違いない。

注

- (一) 重松泰雄「薄ら寒さと春光と——『硝子戸の中』における《過去》——」、『漱石 その新たな地平』おうふう 平成九年五月、小林一郎『硝子戸の中』——「生死」の超越——『夏目

漱石の研究』至文堂 平成元年三月)、大田正紀「漱石『硝子戸の中』論——〈時〉の廻行をめぐるて——」(『梅花短期大学研究紀要』第三十七号 昭和六三年三月) など。

(2) 夏目鏡子述・松岡讓筆『漱石の思ひ出』(改造社 昭和三年一月)。

(3) (1)の重松論文に同じ。

(4) 越智治雄「硝子戸の中と外」(『国語科通信』第十一号 昭和四年二月)。

(5) 三浦雅士『出生の秘密』(講談社 平成一七年八月)。

(6) 『新版禅学大辞典』(大修館書店 昭和五年六月)。

(7) 高木文雄『新版漱石の道程』(審美社 昭和四七年三月)。

※ 本論中の引用は、『漱石全集』第十卷(『道草』)／岩波書店

平成六年十月)、『漱石全集』第十二卷(『永日小品』)『硝子戸の中』／岩波書店 平成六年(二月)、『漱石全集』第二十卷

(断片)／岩波書店 平成八年七月)に拠った。